

「世界を救うパンの缶詰」を読んだ

一関市立一関小学校 六年

平沢 榎澄

「世界を救うパンの缶詰」なぜ、パンの缶詰が世界を救うことになるのだろう。この疑問を解くために、私はこの本を読んでみようと思いました。

この本の主人公である秋元義彦さんは、那須でパン屋を経営しています。阪神淡路大震災の時には、被災者の方々の救済のため、自

分で作ったパンを無償で提供しましたが、数日で食べられなくなりました。そして、被災地から、

「日持ちしないパンではなく、長期保存ができるやわらかくておいしいパンを作ってほしい」

という要望を受けました。そこで秋元さんは、日持ちするパン作りを自分のミツジョーンと考

え、試行錯誤を重ねながら、長期保存できる缶詰パンを完成させます。また、外国の発展

途上国の貧しい子供たちに配ったおたけするなど、あきらめなければ失敗ではない。途中であきらめるから失敗になるんだ。という強い不屈精神で人生の様々な難題を解決していきま

す。

この本を読んで、一番感心させられたところは、どんなに困難だと思っても、決して諦めずとことん考え工夫し、解決策を考え、実践していく。という事です。このことは、誰の人生においても当てはまることだと思

います。日々の小さなことで言えば、算数の宿題など、難しい問題にあたるとすぐに考えるのを諦めてしまいう悪い癖があります。この場合、算数の宿題が難しく、解けないのではない、く、私自身の心の弱さに問題があるのです。人は難題にぶつかると、やらない理由を必死で見つけようとし、時間をかけて難題を解決する行動を起こすより、もっともらしい理由を付けてやらないほうからです。しかし、秋元さんは、解決できない難題はな

い。決してあきらめないで、自分のやるべきことを貫き通す強い姿勢を崩しませんでした。そして、他人からの批判すらもはね返し、日々工夫しながら、前向きに難題に立ち向かってきました。私であれば、もうためかもしれない。このへんでやめようかと思っようかな。場面においても、ヒニチをチャニスに変え、使命感を持つて行動し、たくましく難題に取り組んでいく強い心の持ち主でした。私は自分の心の弱さを改めて考えさせられ、水が

らは見習っていくべきだと思いました。

私はこの本から、今後の人生において必要と思われる大切なことを学びました。それは、人間は必ず失敗する生き物か、失敗したままにせず、諦めないで一生懸命たむきに頑張れば、物事は解決できるという事です。今後、私の人生には、これからいくつもの難題が立ちふさがると思います。その時、諦めない強い心を持ちながら、逃げずに取り組んでいきたいと思っいます。